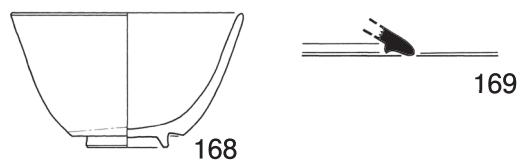


第29図 SC 1 実測図 ($S = 1/30$)

第30図 SC 1 出土遺物実測図
(土器 S=1/3、石器 S=1/2)



第31図 SE 9 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

第IV章 中世以降の調査

中世から近世の遺構は第1章で述べた通り、古代の遺物包含層である③層において検出されている。古代の遺構と比べると希薄な状況で、調査区の西側で溝状遺構1条(SE 2)、土坑1基(SE 3)、調査区中央で溝状遺構1条(SE 9)、東側で溝状遺構1条(SE 8)、土坑1基(SC 1)が検出された。ここでは遺構埋土から遺物が出土した遺構(SC 1とSE 9)について報告を行う。

SC 1は東西方向に1.12m、南北方向に2.6mの不整長楕円形プランの素掘りの土坑である。遺構埋土からは磁器片(166)、砥石片(167)が出土した。166は釉薬が見られるが外面は底部付近まで、高台部分にかけては削り取っている。また内面は見込み部分以外に施釉していたものと推定される。

SE 9は北から南東方向に方線を取る溝状遺構で、調査区中央付近において屈曲している。幅は0.45~0.85mで、検出面からの深さは0.25mで断面は逆台形を呈している。遺構埋土からは陶磁器(168)や須恵器片(169)、土師器片が出土した。168は信楽焼の碗である。

第V章 まとめ

片瀬原第2遺跡の古代の集落の様相

今回の調査区は幅概ね6m、長さが38mというトレンチ状のものであったが堅穴住居跡が26棟、掘立柱建物跡2棟も検出された。この集落の年代を検討するために遺構埋土から出土した須恵器の蓋坏の特徴を概観する。蓋は宝珠形のつまみ(133・143)やそれが扁平化したもの(32・142)とつまみを持たないもの(3)が見られる。また口縁部を見るとかえりがあるもの(23・50・78・133など)とないものが存在する。かえりがないものについては折り曲げて口縁部を成形しているもの(46・

48・90・145など)が多い。壺は高台を有するものばかりで、高台の高いもの(127・128)、低いもの(89・140・141)がある。体部については屈曲が見られるもの(44・89・138・141など)が多く、直線的なもの(137)は少ない印象を受ける。これらの特徴から一部に外れるものもあるかもしれないが、概ね7世紀後半から8世紀中ごろの間に収まるものと考えられる。このことは土師器の高台付壺(2)の形体、屈曲の著しい逆「L」字の口縁部を持つ土師器甕(49・96)や、底部が上げ底や平底を呈し木葉痕を残す土師器甕(30・74・75など)の存在もその裏付けとなるだろう。

この時期の集落跡として近郊には一つ瀬川流域にある古城第2遺跡があげられる。この遺跡は古墳時代中期から営まれ、古代においては掘立柱建物跡を主体とした長期間営まれた集落跡である。さらに円面硯や香炉、「金光」と刻まれた須恵器などの注目される出土遺物があり、日向国分寺に瓦を供給する瓦・須恵器の製作集団の集落の可能性が指摘されている。ここと比較すると本遺跡は短期間に営まれた竪穴住居跡主体の集落で、同時期の集落とはいえ様相に大きく違いがある。

一方、本遺跡から南南東方向に直線で800mほど離れている片瀬原遺跡の調査成果を見ると、60m²という狭い調査区の中で9世紀代に位置づけられる竪穴住居跡が6棟も検出されている。この集落は同じ砂丘上に立地し、竪穴住居跡を主体とするところから、遺跡の年代以外は本遺跡と共通する点が多い。このことから古代における本砂丘上の集落の中心が片瀬原第2遺跡から片瀬原遺跡へ移ったという可能性を指摘することができる。この2つの調査事例は両者ともに狭小の調査区であり、今後の調査事例の増加によって本仮説が検証されていくことを期待する。

土器埋設遺構について

本遺跡からは土器埋設遺構が5基検出された。うち3基は竪穴住居跡の火処と考えられるものであり、いずれも平底の土師器甕が埋設されていた。掘り込みについては底部だけを埋め込む程度の浅いもの(SA20)と甕の半分以上を埋め込むもの(SA10・23)と見られ、また地床炉と考えられる掘り込みが隣接するもの(SA10・20)と単独のもの(SA23)と見られた。

土器埋設遺構38は3つの土器片を組み合わせたやや特殊な印象を受ける。須恵器と(豊前)企救型甕を使用しており、本集落の中心の時期からは後出する可能性が高い。本遺構も前述のとおり炉跡の可能性があり、竪穴住居跡内で検出された土器埋設遺構と同じ機能を想定させる。

一方、土器埋設遺構37は掘り込みが確認できなかった点、焼土や炭化物が確認されずに土器にも二次的な焼成が見られなかった点、土器がやや傾いた状況で検出された点と他の4基とは異なる特徴を多く持っている。このことから本遺構は炉とは異なる機能を考察する必要があろう。

【引用・参考文献】

- 今塩屋毅行2004 「南部九州古墳時代の火処－土器利用炉に着目して－」『福岡大学論集－小田富士雄先生退職記念－』 小田富士雄先生退職記念事業会
- 今塩屋毅行2011 「日向国における古代前期の土師器甕とその様相－時間軸の設定を目指して－」『古文化談叢』 第65号 九州古文化研究会
- 今塩屋毅行2014 「古代の豊前・豊後系土師器－「企救型甕」の軌跡－」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年研究－東九州道調査以後の新地平－』 宮崎考古学会
- 今塩屋毅行2017 「日向における律令期の集落と土器」『一般社団法人日本考古学協会 2017年度宮崎大会研究発表資料集』 日本考古学協会2017年度宮崎大会実行委員会
- 今塩屋毅行・秋成雅博2006 「松ヶ迫窯跡の再検討」『宮崎考古』第20号 宮崎考古学会
- 竹中克繁2008 「日向国における古代土器の変遷－宮崎平野部の須恵器土師器塊編年－」『先史学・考古学論究』 V (甲元眞之先生退任記念) 龍田考古学会
- ※参考文献の一部及び「下耳切第3遺跡」「片瀬原遺跡」「古城第2遺跡」「下村窯跡」「牛頭窯跡群」などの調査報告書の詳細については頁数の都合上割愛した。ご了承いただきたい。